

【外部評価報告書】

委員氏名 穴戸 尚子

【評価1】中期計画・3ポリシーを起点としたPDCAサイクル関連

・計画の方向性について、時代の要請を踏まえた大学の特色化につながるものか。

(総合知教育について)

東洋大学建学の精神「諸学の基礎は哲学にあり」は、貴学が創立時よりまさに「総合知」の獲得を使命として人財育成に取り組んできたことを物語っており、新中期計画において掲げた「未来を哲学する、東洋大学」というスローガンは、内閣府の『知』が集い、新たな価値を創出する『知の活力』を生むこと」という、総合知の基本的な考え方を踏襲するものであると史料する。

総合知教育の編成に係る考え方、具体的方策として、基盤教育・他学部開放科目を全学共有化する一方で、専門教育は少人数科目を増やし、それらを融合させるという姿（かたち）は、教育効果をより一層高め、学生の成長を促すものであると考える。

東洋大学の強みである「哲学」を基盤とする教育、総合大学としての多様性を活かし、矢口学長の強いリーダーシップのもと、全学横断的な教育モデルに取り組まれていることは、「ウェルビーイングを実現する」という時代の要請を踏まえた大学の特色化にもつながっている。

(3ポリシーの妥当性検証のサイクルについて)

ディプロマ・ポリシーをはじめとする各ポリシーの改訂方針は、文部科学省中央教育審議会大学分科会大学教育部会が策定した「3つのポリシーの策定及び運用に関するガイドライン」を踏まえつつ、建学の精神「諸学の基礎は哲学にあり」「独立自活」「知徳兼全」に基づいて策定された「東洋大学スタンダード 2021」を各学部の教育活動につなげていくよう導かれている。高等教育推進センターが作成した手引きをもとに、その方針が全学に行き届くように説明会の開催など工夫がなされ、一体感をもってポリシーの検証と改訂に取り組む体制が整っている。

(効率的なPDCAサイクルの運営について)

3ポリシーに基づくPDCAサイクルを循環させるために、中長期計画推進進捗管理シートを一本化、一体的に把握できるようにしたことは、年度ごと、組織ごとにまちまちであった従来の方式との比較において、より有効かつ効率的であり、さらに要点を抑えた記述によって全学での共有が容易となり、組織を越えたコミュニケーションの質が向上するものと思料する。

学長ヒアリングを年3回実施することにより、丁寧で確実な進捗状況の把握を行うとともに、学長と各組織長との対話の機会を構築するという点でも非常に望ましい体制である

と考える。

- ・より伸張を期待する点や今後の計画に関する助言

「哲学」と「多様性」を強みとする、独自性ある総合大学としてのブランド力をさらに高めていくために、各組織が共通の理念のもとで、さらに自律的な取り組みを進めることに期待したい。

【評価2】教育DX関連

計画1「入学から卒業まで一貫した教育情報のデータ統合とAI解析結果の最適活用」

- ・計画の方向性について、時代の要請を踏まえた大学の特色化につながるものか。

入学から卒業までの「知」の旅(Learning Journey)において、建学の理念である哲学教育の第一歩としての「自己省察」を涵養する多様な仕組みを提供していることは、単なるデジタル化と一線を画す、東洋大学独自の教育DX推進計画であるといえる。

入学段階で自身の成長目標を描き、初年次には履修計画の適切な作成、入学ギャップ解消のためのサポートの提供といった仕組みが用意されている。2~3年次にはインターンシップや留学などで学生の成長を後押しし、4年次には自身の学びを振り返りポートフォリオ化することで、卒業論文、就職活動計画を具現化する。これらの取り組みでは、「知」の旅における学生との接点を増やすことが重視され、それぞれが自己を見つめるタイミングに合わせて、必要な情報を柔軟に提供することで、成長を促す機会とすることを目指している。

定点観測的ではなく、常時観測型で状況を把握し、教職員がその場その場で必要な判断を繰り返しながら最適な支援を考える体制の構築は非常に望ましいものであり、大学の自律的な組織風土にもつながると思料する。

また、データ利活用特区として、国際部、就職キャリア支援部、学生部においてスタートしたアクションは、いずれも社会変化や学生の関心の変化を踏まえ、時代の要請に合致した取り組みであり、より活発な活動として、質的・量的に向上していくことに期待したい。

- ・2023年9月までの計画推進状況について、より伸張を期待する点や課題に関する助言

計画1における目標達成状況について、アウトプット指標①「東洋大学公式アプリ利用学生数は、目標100%に対して実績96.3%とほぼ達成しているが、アウトプット指標②「成績ポジション」及び学習成果測定結果の閲覧割合は、目標70%に対して29.5%と未達であり、「学生が自身の強みや課題に向き合い、自己省察と成長につなげる機会である」というポジティブな側面を打ち出していくことによって、認知度、閲覧数を向上させることが望まれる。

アウトカム指標として掲げる学生満足度は年々向上し、約87%が大学に満足していると回答しているのは当該取り組みの成果であると思料するが、回答数の減少は、やや気になるところである。

・進捗・達成目標などに関するご助言（ふさわしい目標かなどに関する助言）

他の大学との差別化において、最も特徴的な取り組みが「My Journey」であると思われることから、「問いかけ」への回答数、学生が主体的・自律的に発信するコメント数、他者理解や他者共感を醸成する「場」としての活用件数などを今後の達成目標に加えることを検討する余地はあるかもしれない。

【評価3】教育DX関連

計画2「オンキャンパスとオフキャンパスの学習スタイルの高度化と多様化」

・計画の方向性について、時代の要請を踏まえた大学の特色化につながるものか。

「対面か」「非対面か」の議論を越えて、「アフターコロナの教育はいかにあるべきか」という観点で、コロナ禍を教育改革の好機ととらえ、学修者本位の教育システムの構築を目的として、遠隔授業の高度化と質保証が検討されている。

なかでも、カリキュラムレベルにおける「全キャンパス共通基盤教育授業」は、どのキャンパスの学生も幅広い分野の基盤教育を同一レベルで受講できることから、総合知の獲得や人間力の育成が重視される時代の要請を踏まえたものであり、思い切った取り組みとして評価できる。

また、1・2部間の合同メディア授業は、第2部授業運営の負担軽減等の合理的背景に基づくものであるが、「2部生のキャンパスライフを変える可能性」に大いに着目するとともに、多様な学生が集う東洋大学に新たな学びや交流の機会が創出されることにも期待したい。

・2023年9月までの計画推進状況について、より伸張を期待する点や課題に関する助言

2025年からスタートする改訂新カリキュラムにおいて、全学カリキュラム委員会が中心となって、新しい中長期計画の基本方針のひとつである「3万人の Learning Journey を支える新しい教育の姿（かたち）の創造」を踏まえ、総合知領域の授業運営モデルを確立すべく取り組んでいる。

現時点では、アフターコロナにおける学生の要望や教員の方針等もあり、対面授業がメインとなっていることが推察されるが、4キャンパス14学部を擁する総合大学としての強みと多様性を活かして、建学の精神に基づいた教育理念を実現するために、基盤教育の全学共

有化の目的を共有し、強い意志でオフキャンパスの高度化を推進することが重要であると考える。

・進捗・達成目標などに関するご助言（ふさわしい目標かなどに関する助言）

アウトカム指標として「授業評価アンケート結果の経年比較する」とのことで、授業のわかりやすさ、学修内容の理解、学修到達目標の達成を経年比較することは興味深く、2023年度修了時点の比較結果に期待したい。

また、非対面授業における課題としてあげられている「学生へのフィードバック」について、なんらかの指標を設定するのも効果的ではないかと考える。

【その他】 上記項目以外でご意見がございましたら、ご記載ください。

出向元 JAL グループは、経営再建のために会長に就任した故・稲盛和夫氏の指導のもと、企業理念の冒頭に「全社員の物心両面の幸福を追求する」を掲げ、その結果が「お客さまへの最高のサービス」や「社会の進歩発展への貢献」につながる、としており、大学も企業も、その存在意義・目的を関係者全員で共有することが何より重要であると感じています。

「未来を哲学する、東洋大学」というスローガンのもと、「学生に向き合い、学生の成長とともに育ち続ける大学」を目指して、教育 DX 推進基本計画を全学で実行されることに、今後も大いに期待しています。